

桜田門

1620年頃に完成した桜田門は、旧江戸城の現存する最も大きな門です。この門は、「桜田門外の変」として知られる暗殺の現場として、皇居外苑の中で最も有名です。1860年、藩主である井伊直弼が浪士によって暗殺されました。将軍に次ぐ地位の大老、井伊直弼の行いが天皇の権力衰退につながるとみなして怒れる尊王攘夷派の浪士達でした。

桜田門は、2つの門で構成されています。小ぶりで頑丈な高麗門を後ろには、さらに大きな櫓門が配置されています。二つの門は直角に配置され、閉鎖された空間を作り出しています。これは、四角形(枡形)の防御門です。これによって侵入者は中に入ってから直角に曲がらざるを得なくなるため、速度が落ちて攻撃を受けやすくなります。この作りは破ることができないと考えられており、江戸時代(1603年-1867年)に盛んに使用されていました。

射手やその他の兵士たちは櫓門に陣取り、高麗門を突破した敵陣に矢を放ち、石を落としていました。

桜田門の背の高い石垣は、モルタルなどを使用せずに積み上げられています。職人たちは、石を隙間なく組合せ、侵入不可能な門を作り上げました。これらの巨大な石は、大半が東京の南西約100キロにある伊豆半島から船によって運ばれてきました。1923年の関東大震災の際には、頑丈な桜田門でさえも地震の影響を受け、石垣の岩のいくつかが緩みます。さらなる損傷を防止するため、修復作業によって門の構造が強化されました。現在、桜田門は国の重要文化財に指定されています。